2019年3月31日

福音書からのメッセージ

だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。

（ルカによる福音書15章32節）

この放蕩息子のたとえを、イエス様は誰に対して語ったのでしょうか。15章1節から3節に、このように書かれています。

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。

ファリサイ派や律法学者たちは、自分たちこそ神さまの言いつけを守り、正しい道を歩んでいる者だと自覚していました。決められたように礼拝し、断食をおこない、犠牲をささげていました。そして彼らは他人に対して、「あいつは罪を犯している」、「あんなやつと食事を一緒にすることはできない」と蔑みます。ファリサイ派たちはいわば、父親である神さまのいいつけに従い、そのそばで何の不平も漏らさずに、ずっと働いてきたお兄さんです。そして父と一緒に働くことから逃げ、自分の好きなように生きた弟とは、罪人や徴税人の姿です。その弟が、食べる物がなく、もう一度父の元に帰ろうと決心した。そしてその弟を父親が受け入れた。そして祝宴を開いた。そんなことがあってはならないと兄が怒ったように、ファリサイ派たちもこの話を受け入れることができなかったのかもしれません。

ではわたしたちはどうでしょうか。わたしたちもまた、この兄のように、弟を受け入れる父親を非難するでしょうか。そういう気持ちが出て来たときには、どうぞ、思い起こしてください。わたしたちは、一度も放蕩したことがなかったのだろうかと。

放蕩とは「自分の思うままに振る舞う」ことです。わたしたちは神さまの方を向かず、自分の思いに、そして欲望に従って生きてきたことはなかったでしょうか。この放蕩息子の物語のように大事件はなかったかもしれません。でもわたしたちもまた、多かれ少なかれ、何度となく神さまの元を離れ、その思いに反し、自分勝手なおこないをしていたのではないでしょうか。

今日の場面で、ぜひ心に留めておいていただきたいことがあります。それは遠くにいる弟を見つけたときの、父の行動です。父の視線は、いつ帰ってくるかもしれない息子の姿を、いつも探していたのでしょう。そして弟を見つけた瞬間、父は弟を憐れに思います。まさにはらわたがよじれるような思いです。その思いの中、父は弟に向かって、走っていきます。このようなことは、当時の社会では考えられないことです。しかし父はそうしました。それが神さまのわたしたちに対する思いなのです。

神さまはそのように、何度もわたしたちを抱きしめてくださる。わたしたちがどんなに放蕩し、神さまに背き続けていても、わたしたちが悔い改め、神さまに向き直るのを、ずっと待っていてくださるのです。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/